
胡蝶の夢

コバヤシ ツヤコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

胡蝶の夢

【コード】

N89810

【作者名】

コバヤシ ツヤコ

【あらすじ】

現実と過去の狭間で、現実と夢の狭間で、現実と理想の狭間で。

よれよれのパジャマを脱ぎながら思案を巡らせてみたものの、特に思いつくものも先立つものもないし、ここは近所をぶらぶらと歩いて光合成でもするかなさそうだ。もしかもしかと昨日の食べかけのメロンパンを口に入れて、その辺にあったシャツにカーディガンを羽織って外に出る。

ぼんやりと、できるだけ日陰を選んで歩く。

道の途中にある本屋や百円均一ショップ、ちょっと大きめの文具店なんか立ち寄ってはみたものの、特にこれといった収穫もなく気付けば駅まで来てしまった。引き返すのも億劫なので駅の逆側をとぼとぼ歩いていると、なんだか懐かしい景色に出くわした。

病院を挟んだ道路向かいに、ちいさくて人気のない公園がぽつんとあった。こつち側にくることなんて滅多にないからまったく知らなかった。公園と言っても、あるのは錆だらけのブランコだけ。実家とは遠く離れた場所だから実際の景色と多少の相違はあるだろうけれど、それは幼い頃見た景色にそっくりだった。公園を囲う緑色のフェンスにはびっしりと朝顔のツタが絡み付いて、薄青や薄紫の花を咲かせている。さながら秘密の花園のような雰囲気だな、と思う。そして私の足はまるで何かに導かれるかのように公園の中へ歩き出す。ブランコの脇に悠然と佇む大木の前で足を止める。これも同じだ。目をとじて、右手をそつと幹に押し当てる。ちいさい頃の私は、なにかあの木に願い事をしていたような……。

「『千秋くん』」

ふわっと、頭の中に誰かの影が浮かび上がる。千秋くんって誰だっけ？

「なにしてるの」

突然後ろで声がして、ぞわりと冷たいものが足下から這い上がって

くるのを感じた。振り返ると、そこに居たのはランドセルを背負った小学生の男の子だった。違う、千秋くんじゃない。当たり前なのにほっとしている自分がいる。だって千秋くんがここに居るわけがない。千秋くんはあの病院で、

「ちよつとね、木とお話をした」

「ふうん」

男の子は私の隣に立って、真似するように右手を幹にあてる。真っ白な腕だ。

「ぼくも話せるかな」

「うん、でも修行しないとなかなかうまく話せるようにはならないかも」

「そっか」

男の子はまっすぐ私の目を見た。

「ところで、さっき言ってた千秋くんってだれ？」

「……友達、昔の」

「ずっと忘れちゃってたくらい、昔の？」

ランドセル姿に似合わない、大人びた表情と台詞。さっき感じた冷たいものが、ぴたりと肩のあたりに貼り付いているような感覚。それ以上、彼に応える言葉が出てこない。そのまま視界がぐるぐると回りはじめて、私の意識は千秋くんと一緒に学校へ通っていた頃へと引き戻されていった。

「けーいこちゃん」

団地の下から声が聞こえる。

「ほら桂子、もう千秋くん来ちゃったよ」

鏡の前で髪を二つ結びにしていると、お母さんが部屋からランドセルを持ってきてくれた。

「いま行くー！」

ベランダから下で待っている千秋くんに向かって手をぶんぶんと振

ると、千秋くんも両手を振って返してくれた。今日も変わらずやさしー千秋くん。ふたりともコスモス団地に住んでいて、幼稚園からずっと同じクラスで、わたしの一番のおともだち。

「ごめんね、いつも待たせちゃって」

「ぼくも今来たところ。行く」

どちらからともなく手をにぎる。それも幼稚園のころから。一緒に行って一緒に帰ってきて、千秋くんのママの帰りが遅いときはうちと一緒にカレーを食べたりなんかして、そのまま日曜日はお泊まりしたりなんかして。それも幼稚園のころから。わたしの一番のおともだちだから。

「桂子ちゃんと千秋くんが両思いつて本当？」

休み時間、莉子ちゃんがこっそり近寄って話しかけてきた。

「ちがうよ、千秋くんとは小さい頃からのただのおともだちってだけ。本当はそんなこと全然思っていないけど、千秋くんの心はわたしから揺るがないって分かってたからうそをついた。」

「本当に？　じゃあお願いしたいことがあるんだけど、桂子ちゃんにしか頼めないの」

そしてわたしは、そのうそをすぐに後悔することになったんだ。

「千秋くん、髪の毛一本くれない」

「髪の毛？　いいよ」

さらさらでくせのない髪の毛を、千秋くんはひよいと抜いてわたしの手のひらに乗せた。

「あー、やっぱりもう一本」

「変な桂子ちゃん」

そう笑って、もう一本くれた。

ひとつは莉子ちゃんの方、もうひとつはわたしの分。莉子ちゃんが言ってた、ふたりが両思いになれるおまじない。莉子ちゃんの気持

ちがわたしの気持ちより強いことなんてあるわけないけど、でもおまじない効果で莉子ちゃんのおまじないがわたしと同じくらいになっちゃって、わたしの千秋くんがわたしのものじゃなくなっちゃうのはいやだった。だったら莉子ちゃんがおまじないをした次の日に同じおまじないをすればいい。じゃんけんだって後だしした方が勝てるんだ。そう思った。

莉子ちゃんが嬉しそうにおまじないをしたって教えてくれた日の放課後。

彼女が言っていた通り、ピンク色の折り紙に好きな人の名前を書いて髪の毛と朝顔の夕ネを包んでハートの形に折って、団地のすぐそばにある公園の木の下へ埋めた。次の日から千秋くんは学校に来なくなつた。理由は先生が教えてくれなかつた。わたしがあんなうそついて、莉子ちゃんにいじわるして千秋くんを手にいれようとしたから、そのせいで千秋くんに会えなくなっちゃつた。罰が当たつたんだって思った。

一回だけお母さんと一緒に行つたお見舞いの日。千秋くんは静かに眠っていて、泣きつかれた顔をした千秋くんのママからもう二度と目覚めないかも知れないって言われた。それから一度もお見舞いに行くことができずに、気がつけば学年も変わって彼の席がなくなつて、いつの間にか彼のこと自体忘れてしまつて。

中学生になつてからはじめて金木犀が香つた日。

学校から帰つて来たら突然、テーブル脇でうずくまっていた母から聞かされた。

「千秋くんが亡くなつたつて」

最低だけど、一瞬だけ千秋くんって誰だっけ？ って思った。そしてあつという間にいろんなことを思い出して、それからまたすべて

慌てて取り出して画面を確認する。非通知。

誰からなのかも分からない着信が、私を現実へと還す。

「またね、桂子ちゃん」

そう呟いた男の子の姿は、もうどこにもなかった。

胡蝶の夢、金木犀

「それじゃあママ帰るけど、また明日のお昼になったら来るからね、さびしいだろうけど我慢してね」

ママの手がやさしくぼくの頭をなでた。

「うん、大丈夫だよ」

ぼくがそう言うとママは泣きそうな顔で笑って、ぼくのランドセルと体操袋を抱えて部屋から出ていった。ママのハイヒールの音が遠くなくなっていく。きつとまた会社に仕事をしに戻るんだ、と思った。

はじめての入院。

体育の授業中にとつぜん目の前が真っ暗になって、そのまま救急車で運ばれた。なにがなんだかよくわからないまま今日から入院することになってしまって、ぼくよりもママの方が心配しているみたいだった。ぼくは今、どこまでも白い病室の、ひっそり静まり返った空間にひとりきり。前におじいちゃんのお見舞いに来たときは6人部屋で、みんなで将棋をしたりテレビを見たりおせんべいを食べたりにして、すごく楽しそうにしていたのを覚えている。ぼくもできればそっちの方がよかった。だけど、きつとママがぼくのためを思っ てひとり部屋にしてくれたんだから、文句を言っ てはいけないんだ。

夕方に看護婦さんがやってきて、夕飯を食べて体温を計って、それからまたひとりになった。ママが置いていってくれた漢字ドリルをやったりマンガを読んだりしていたけど、すぐ飽きてしまった。ベッドにもぐって目をつぶってみても、ちっとも眠くならない。まだ夜の8時。いつもだったらママと猫のモモコと一緒にテレビを見ている時間だ。カーテンのすきまからちよつとだけ外をのぞいてみる。

病院の向かいにある公園に、ちらちらと光る電灯。その下にぼんや

りと浮かぶ、ベンチに座る人影。

「ゆう、れい」

心臓がドキリと大きく鳴った。カーテンを握る手が強くなる。ぎゅつと。ぎゅつと。爪が手のひらに食い込んで痛い。だけど力を弱めることができない。だめだ、このままじゃ気付かれる。あのひとがこつちを向いてしまう。ちらり。目が合った。女の人の、あざやかなオレンジ色に光るふたつの目。ふつと力が抜けて、体育の時間に味わたのとまた同じ感覚がやってきた。真っ暗になる。真っ暗に、

「……………あれ？」

気がつくと、ぼくの目はまた天井を見つめていた。消したと思った電気がついていて、ふかふかのベッドの中に胸から下がすっぽり包まれている。夢、だったのかな。

「やあ」

真っ白だった天井がオレンジ色に染まる。オレンジの中に、目をまあるく見開いたぼくが映っている。鼻と鼻が触れ合いそんな距離に、女の人の顔があった。

「ひぐつ……………」

「おいおい、病院では静かになって教わってるだろう？」

女の人の冷たい指がぼくの口を優しく、でも決して開かないように押さえつける。

「まさか君のようなお子ちゃまに気付かれてしまつとは思ってなかった。これはやんごとなき大失態だ」

首を伸ばすようにして頭をずらし、女の人が立っているはずの位置を見てみる。当たり前のように真っ白な壁があつて、そこから胴体がよつきりと生えている。

「君は一度した約束を守るかな？ できるなら手を離してもいい。できないならこのまま君の命をもらっていく。どうかな、悪い条件

ではないと思う」
にっこりと笑う女の人に向かって必死にうなずくと、出会ったことを誰にも話さない、という約束で手を離してくれた。

「自己紹介がまだだったね。私はこの病院を守るいい神様だ」

「いいかみさま？」

ママとよく似たスーツを着たその女の人は、胸の前で祈るようなポーズをした。

「そうだ、いたいけな子羊たちの命が好き勝手に奪い去られないように、わるい神様からこの病院の命を守っている」

「わるいかみさま……死神のこと？」

「君は頭がいいな、いい神様になれる素質を持つてる」

ベッドに腰掛けて足を組んだ女の人、本人いわくいい神様は名前を桂子ちゃんと言うらしい。なんでもとてもいい人生を送ったのが神様の神様に認められて、いい神様に生まれ変わったのだそう。

「君の名前は千秋というのか、いい名前だ」

「でも女の子みたいだって言われるから好きじゃないよ」

「好きじゃないなら名前だけでもらっちゃおうか」

「なくなったら困るから大丈夫」

「ふふ。冗談だよ、名前は神様が授けるものじゃないからね、勝手に奪ったりできないんだ。……おっと、もうそろそろ行かなくては。短い時間だったけど楽しかったよ、千秋」

「また会えるかな、ここひとりで寂しいんだ」

桂子ちゃんはもちろんだとも、言いながらぼんぼんと頭をなでてくれた。ママと同じ優しい手。ふわふわ鼻をくすぐる金木犀のにおい。だけどその手は、やっぱりひどく冷たかった。

桂子ちゃんがいなくなって、時計を見た。針は夜8時少し前を指している。桂子ちゃんを見つける前と変わっていないけれど、秒針は

ちゃんと動いている。

「きつとこれもいい神様の力なんだ」

なんとなく納得して目をとじる。意識がすつと溶けていくような、ふしぎな感覚。そしてぼくは、さっきまで眠れなかったのが嘘のようにぐっすりと眠ってしまった。

「昨日はよく眠れた？」

次の日、ママは面会時間ちょうどに現れた。

「うん、とつてもよく眠れた」

「なんだか顔色もいいみたい。安心した」

そう言つてイスに座るママの方が、なんだか青白い顔をしている気がした。

「ママ、具合悪いんじゃないの？」

「ママは大丈夫。日曜日にはパパも来てくれるって言つてたから…」

…あら？ 千秋、お外に出たの？」

ママがぼくの髪についていた金木犀の花を指でつまんで見せてくれた。きつと桂子ちゃんがぼくの頭をなでくれた時についたんだ。

「ううん、お外は出てないよ」

「じゃあ看護婦さんが連れてきちゃつたのかな」

「どうだろ、ぼくわかんない」

ママについた、はじめての嘘。桂子ちゃんと会つたことは誰にも言わないつて約束したから。それなのにすぐぼくに見つかると、会つたことがバレるようなものをわざわざ残していつちやうし、神様なのになんておつちよこちよいなんだろ。そう思つたらなんだかとてもおかしくなつて、ぼくはクスクス笑つてしまった。

しばらくいろんな話をした。

あれからみんなが見舞いに来たいと言つてくれていることや、となりの席の莉子ちゃんがふたり分ノートをとつて一週間ごとに届けしてくれること。入院は冬休みが終わるころまで続くかも知れないこ

と。パパは会社の人に了解してもらったので、これから毎週日曜日に家に来てくれること。ぼくのためにみんながいろいろしてくれるのが、なんだかちょっとだけ嬉しいと思ってしまう。

ママがこれから仕事があるからと言って立ち上がったとき、入れ替わりに看護婦さんが入ってきた。ママがおじぎをして出ていくと、看護婦さんがニヤリと笑う。

「やあ、また会ったねえ」

「桂子ちゃん！ 看護婦さんだったの？」

「ふふふ、これは世を忍ぶ仮の姿なのだ。いつ死神が襲ってくるとも限らないからね」

ボールペンをくるりと回して得意げそうに言う桂子ちゃん。

「髪に金木犀の花がついてたよ、おかげで桂子ちゃんと会ったことがバレちゃうんじゃないかってヒヤヒヤしたんだから」

「あ、取っちゃだめだよ。君を守るお守りなんだ」

「でもまたついてたら怪しまれちゃう」

桂子ちゃんはしばらく悩んだあと、胸ポケットから蝶々の模様が入ったあめ玉をくれた。金木犀と同じオレンジ色をしている。

「これを舐めるといい」

「……にがいよ、すごく」

「良薬は口に苦しと言っからね、いい男になりたかったら我慢して舐めなさい。また仕事の合間に遊びにくるよ」

右手をひらひらと蝶々のように振りながら、桂子ちゃんは部屋を出ていく。昨日はあんなに寂しかったのに、今日は全然寂しくない。

桂子ちゃんがいなくなったあと本を読んでいたらまた目の前が真っ暗になった。ゆっくりとベッドに横になる。真っ暗な視界の中で、真っ赤な朝顔が咲いているのが見えた。これはもう夢なのかな。からだがすごく熱い。目を開けても目を閉じても同じ景色。なんだか息が苦しい。

「はあっ」
思いきりため息をつく、ぼくの口の中からたくさん蝶々が飛び出してきた。金木犀の匂いをさせながら一斉に朝顔に向かって飛んでいく。すごい。桂子ちゃんが戻ってきたら教えてあげよう。そう思って目を閉じてまた開いた瞬間、パパとママの泣き顔が見えた。せつかく久しぶりに会えたのに泣かないで。

目を閉じる。朝顔が半分に減っていた。その下には蝶々がばらばらになってたくさん積もっている。ぼくが息をするたびに蝶々が生まれては死んでいく。

目を開ける。莉子ちゃんがぼくの胸に覆いかぶさって泣いていた。ごめんね、ノート受け取れなかった。

目を閉じる。朝顔はほとんど無くなって、ばらばらになった蝶々が辺り一面を埋め尽くしている。

目を開ける。目の前に桂子ちゃんの顔があった。オレンジ色の瞳からぼたぼたと涙が垂れて、ぼくの顔にかかる。桂子ちゃんはどうしていつもそんなに悲しそうな顔で泣くんだろう。笑ってる方が可愛いのに。

「またね、桂子ちゃん」
目を閉じる。

そこにはもう、何もなかった。

胡蝶の夢、彼岸花

木曜日、朝7時40分。待ち合わせに10分遅刻してきた桂子が、着くなり興奮した様子で口を開いた。

「今すれ違った人、超格好よくなかった？」

「ごめん見てなかった。はい、これ昨日言ってた本」

本当はそのすれ違った人とやらも彼女をぼうつとした目で追っていたのを、私は知っている。だけど彼女の興味は既に彼から離れてしまった。彼女はいつもこういうのだ。

「ありがと。どこの本屋行っても売り切れで困ってたんだよね。どうしてもこの本読んでからじゃないと勉強する気になんなくて。テスト前だつてのにごめんね」

「読んだつて勉強しないでしょ、毎回余裕で赤点取るんだから」

「えへ、バレたつた」

桂子は本で口を隠すようにしてにんまりと笑う。

ミルクティみたいに柔らかかで甘い茶色の髪が、歩く度にふわふわ揺れる。大きなつり目は洋猫のような気品を漂わせていて、控えめながら主張を忘れない唇はまるで桜の花びら。私の理想をすべて持ち合わせた桂子は、何より大切な宝物。

「最近あの文化祭で出会つたつて彼氏の話聞かないね」

「あ、楓高の人？ 一週間前に別れちゃった。こないだ一緒に食事行つたんだけど、食べ方が超汚くて、なんかもう一瞬で冷めちゃつた。あはは」

「残念」

「やっぱり莉子以上に私のこと分かってくれる人なんていないんだよねえ」

「そうかもね」

私たちは微笑み合う。
ねえ桂子、私は心からそう思ってる。

「あ、おはようございまーす」

昇降口で出会った教師が私たちを見比べて言う。

「橙野桂子、最近随分髪が茶色いんじゃないのか？ スカート丈も隣の赤岸に比べると規定違反バレバレだぞ。来週の頭髪検査までに直しておけよ」

「はい。じゃあ先生、黒く染めたら国語の点数おまけしてよね」「努力次第だな。しかし本当にお前らは一緒に居るのが似合わんよなあ」

こんなふざけた態度をとつても、教師は怒るところかちよつと笑いながら去っていく。桂子以上に誰からも好かれる人を、私は知らない。

「全教科満点と全教科赤点だもん、ちよつと莉子の点数わけてくれても罰は当たらないと思っちゃうよね」

「でも私、体育は平均以下だよ」

「とじなべにぶた？」

「割れ鍋に綴じ蓋、のことかな」

「そぞ。ふたりでひとり。あー、今日もミスドで勉強会したいんだけどいいかな。次こそ赤点脱出目指して頑張りたい。やっぱり悔しい」

「今きたばかりなのに放課後の話？ じゃあドーナツ3個で1教科ね」

「よーし！ 今日桂子ちゃんのおごりだー！ まかせとけー！」

そんな会話をしていると間もなく教室に着いた。私たちの席は窓際の前から3番目と4番目。机に鞆を置きながら何気なく外へ目をやると、校舎前の花壇でビニール傘をさして立っている学生姿が

目に入った。

「なんで傘さしてんの？ 雨降ってないよー」

同時に気付いたらしい桂子の声が声をかける。気付いた彼がこちらを見上げた。

「。」「

何か咳いたように見えたが、聞き取ることはできなかった。彼はそのまま、また花壇に向き直る。

「変わった人だね」

「うん」

桂子は始業のベルが鳴るまで、ずっと彼のことを見つめていた。そして私は、ずっとその後ろ姿を眺めていた。

「あのビニール傘の人、紫垣千秋って言って、なんか病気で長いこと入院してた人らしいよ。さっき隣のクラスの子が話してた。2組に今日から来たんだって」

放課後、帰り支度をしていると唐突に桂子から彼の話題を振ってきた。

「ふーん」

「入学したときから格好良くって評判だったのに超変わり者で、日向に居ると倒れちゃうんだって」

「へえ」

「でね、あのビニール傘は入院する前から有名で、あの傘からは金木犀の匂いがするんだって」

「そう」

「金木犀の匂いは蝶々が嫌いな成分が入ってるらしいんだけど、莉子知ってる？」

「知らない」

「あの花壇には朝顔がいっぱい咲いてて、赤い朝顔が咲くと死人が

出るってこの学校の七不思議の」
ガタン。喋り続ける桂子の言葉を遮るように席を立った。

「あの人の興味があるのは桂子であって、私じゃないよ」

「……そうだよね、ごめん」

「用事思い出したから、勉強会はまた今度にしよう。じゃあね」

「莉子！」

ドアを閉めるその瞬間、桂子が泣きそうな顔をしているのが見えた。きつと、私も同じような顔をしていると思う。桂子が誰かに夢中になることなんて今までに何度もあったのに、今回は言いようのない不安感に襲われていた。

好きって気持ちがあんなにも人を醜くするなんて知らなかった。

翌日から、桂子は学校を休んだ。

メールも電話もないままに一週間が経ち、久しぶりに登校してきた彼女の姿に教室がざわめく。桂子は漆黒の髪をぱつんと切りそろえ、制服をすつきり着こなしていた。

「おはよう」

そう言っすぎてこちなく微笑んだ目元はちよつと赤い。今まで見たことのない銀縁のメガネが凜と輝いている。

「橙野さんどしたの?! イメチェンってレベルじゃないよ〜それ」

「でも似合ってるよね、なんか生徒会っぽい」

「スカートって新調したの? すごいね」

「やっぱり可愛い子は何やつても可愛いよ〜」

またたく間に女生徒たちが桂子を取り囲んで、結局私と桂子が話すことはできなかった。

放課後、教室にビニール傘を携えた紫垣千秋がやってきた。

「桂子ちゃん、一緒に帰ろ」

相変わらず桂子の周囲に居たグループのひとりが素つ頓狂な声をあげる。

「えっ、橙野さんって千秋くと知り合い？」

「うん、友達」

休んでいた間に何があったのか、私は知らない。知りたくもない。彼女が教師たちに嫌味や小言を言われても変えることのなかった容姿を180度変えた理由も。

「莉子も一緒に帰ろうよ」

桂子が振り向いて言った。

「用事があるから」

「じゃあ私も一緒に行くよ」

「一人で行きたいから」

「なんで、どうしてそんなこと言うの」

「それはこっちの台詞なんだけど」

騒然とする教室の雰囲気嫌気がさして、鞆を抱えるようにして廊下の方へ向かう。紫垣千秋はドアに寄り掛かって気怠そうにこちらを見ている。

「莉子ちゃん、桂子ちゃんに悪気がないの知ってるでしょう」

「あなたに莉子ちゃんなんて呼ばれる筋合いはありません」

「……ふたりともすぐ忘れちゃうだもん、困っちゃうよ」

彼が笑ったその顔に、見覚えがあるような気がする。

「まだおまじないは好き？」

その言葉で、私はすべてを思い出してしまった。

「来週の土曜日、千秋くんが動物園に行きたいって言うから一緒に
行こうよ」

「たまにはふたりで行ったら」

「だって千秋くんのことも莉子のことと同じくらい好きなんだもん知ってるよ。私が桂子と同じくらい千秋くんを好きだったことも、桂子が私と同じくらい千秋くんを好きだったことも、千秋くんがずっと私と桂子を好きでいてくれたことも。」

「莉子は今、好きな人とかいないの？」

「恋ならしてるよ、ずっと」

恋人なんかよりずっと近くで想ってる。

「おはよう、桂子ちゃん、莉子ちゃん」

目を閉じても、彼はどこへも行かない。

ずっとずっと一緒にいるんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8981o/>

胡蝶の夢

2010年12月14日17時14分発行